

# 空間を区切ること

伊集院 理子

昨年、三歳児クラスで新入園児を迎えた時、慣れない環境の中で子どもたちはそれぞれに自分を安定させる方策を自分なりに探っている姿が見られた。多くの子どもは、幼稚園で出会った大人である教師との関係を支えに、教師の動く先々についてまわることで、どうにか一日を過ごしていた。Y子は、大好きな小さなボールを見つけ、それをいつも持ち歩くことで心の支えとしていた。そのボー

ルで遊ぶわけではなく、他のことに夢中になつてふとボールを手放してしまい、後からその事に気づくと、「Y子のボールは？」と言って、泣いて探していた。K夫は、朝来ると、箱積木で自分が一人入れる大きさに囲いを作って、その中に座って周りの様子をよく見ていた。K夫にとっては、広い保育室の中で自分の居場所を確保すること、その居場所は、他の物、他の人の侵入を拒む一人分の広

さであることが必要であった。私には、そのK夫の姿がとても印象に残っていて、それ以来、空間を区切る子どもたちの様子に注目するようになった。そうして見ると、子どもたちは、日常の保育の中で様々な空間を区切って遊んでいる。

S夫もよく空間を区切る子どもの一人である。S夫は人との関係をつくるのがむずかしい所があって、その頃は、園庭で、お気に入り赤い車にのって多くの時間を一人で過ごしていた。教師との関係をS夫の方から求めてくることはあまりなく、なかなか目があわなかったり、こちらが何を言っても、さっぱりS夫の心に届いていかないという感じを覚えていた。

S夫は、ゴザやついたて、いす、机などを使って、教室の一角や、おままごとコーナーの周りを大々的に一人で黙々と囲むことをし

ていた。又、ある時は、園庭のお山へとつながる橋の入口の所に縄をかけて「工事中にする」と言って、セロファンテープと紙をはさみをわざわざ教室から運んで、立て札をかけたこともあった。このように空間を区切りたがるS夫の行為は、外に対して、特に人に対して、自分を全面的に開くことができないS夫の心の状態を反映しているように、私には思えた。

その後も、S夫の空間を区切る活動は時々見られたが、ある時から、区切る物の中にお店屋（こちらの園では、各クラスに、ひきだしのついた台に屋根をつけた木製のお店屋がある）が含まれるようになった。それまでもお店屋その物には興味を持って、自分の思う所に移動したり、上に乗ったりはしていたが、お店屋の前に座って、お店屋本来の活動をする姿は見られなかった。ついたてやタオ

ルかけ、テーブルで区切られた空間の中に、お店屋が位置づいた時に、S夫はお店屋の前に座って、「いらっしやい、いらっしやい」とやり始めた。「いらっしやい、いらっしやい」と声はかけても売る物は何もないお店屋である。私は、その時は、S夫が始めた活動を発展させようと思って、以前に他の子と作ったアメを導入した。そのアメを媒介に、買いに来た友だちとS夫とのやりとりが成立したことはしたが、今から考えると、そんな表面上の活動の発展よりも、空間を区切るよう区切ろうとしていたS夫が、閉ざした空間の何か所を開いて、外に働きかけだしたことそのことに大きな発展があったのだと思う。単独のお店屋では生まれなかった開かれた外に働きかける行為が、閉ざされた空間の中に位置づけられて初めて始められたことがとても象徴的に思われる。S夫の心が外に開かれる

ためには、まず自分を囲むことが必要で、自分がきちっと囲めれば、外に開く突破口を自分からつくりだしていくのだろう。

その後も、S夫は空間を区切ることを続けていたが、必ずしも「いらっしやい、いらっしやい」とやっていたわけではないが、いつもお店屋がその一郭をなしていた。

二期、三期になるにしたがつて、S夫は、まだ淡いものながら人に対する興味を強め、人と関わろうとする姿が見られるようになっていった。一学期の頃、友だちなどあまり意識している様子もなく一人で行動することが多く、友だちとの多少のぶつかりあいがあったても、無表情であったS夫が、二期の後半には、友だちが叩いたといって泣きながら教師に訴えてきたことがあった。友だちが叩かれたくない存在として特別な意味を持ちだしたS夫の心の動きを物語っているように

思う。

四歳児になったS夫はさらに人に向かう気持ちが強めている。これまで、他の子どもが教師に求めるように何かをつくってほしいということがなかったS夫が、はつきりと教師に対して思いを伝えてくるようになった。

担任だけではなく、他の教師とも自分の方から自分の思いを伝えることが多くなっている。大人に対しては大分心を開き関わろうとしたS夫であるが、友だちが相手だとまだうまく自分の思いを伝えることができず、うまく折り合えない所がある。

そんなS夫が最近積木を高く積んで塀のようにして「ここ駐車禁止なの」と言っていた。さらに一歩人との関係を広げるために、

又自分を囲む必要がでてきた表れではないか  
と見守っている所である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

